

角川源義賞「歴史研究部門」選考委員会より

## 今後の「核」となる中世神道の思想史

黒田日出男

『中世天照大神信仰の研究』は、天照大神をめぐる「言説」を博搜し、その思想内容を読み解することによって、中世神道を多面的に描き出した思想史の大著である。

中世神道の研究は、一九八〇年代に大きな転機を迎えた。故伊藤正義による問題提起を受けとめた日本文学研究者らが、次々に「中世日本紀」のテキストをさがし出し、中世神道を狭義の「神道書」の世界から解き放っていったからだ。とくに山本ひろ子の一連の仕事は、著者にも大きな刺激を与えたのであった。

かくして中世神道の研究を志した著者は、一九九〇年代にそうした研究潮流に加わる。日本文学研究者らの諸寺社での文献調査に参加して鍛えられ、次々に紹介されていくテキストの読解を通じて、中世神道の有り様を思想的に把握していったのである。遅れて参加した者のなすべき研究とは何か。それは多様に広がっていく研究をまとめ上げ、骨格的

な把握を成し遂げることだろう。それは誰でも出来ることではない。仏教史と神道史を学び、文学研究者と共に寺社での文献調査に従事しつつ、二〇年間にわたって思索を重ねてきた著者だからこそ可能であったのだ。

五部構成の大著はとっつきにくいように見えるが、実はそうではない。緒言の研究史と課題設定は明快であり、各章も読み進むのに困難はない。そして何よりも、その中世神道の思想的把握がはつきりとしている。これでようやく「中世日本紀」と中世神道の緒言「説を、日本史研究者や中世神道に関心のあるさまざまな立場の者たちが理解したり、論じたりすることが可能になった。中世神道の「核」となり「要」となる仕事がついに現れたと言えるであろう。

問題は、本書の中世神道の内容把握が、中世寺院史・宗教史研究を牽引した故黒田俊雄の中世神道の位置付け、すなわち中世神道はあくまで中世仏教の〈化儀〉であり、独立した存在ではないとする見解をはたして超えられたか否かだが、これは著者だけでなく、中世神道を歴史的に把握しようと思っっているすべての論者や読者に向けられた「問い」である。さあ、皆で論じ合おう。